

空襲体験

畠山 歌子

昭和十九年、私が五才の夏、父は太平洋炭鉱の強制配転で九州の炭鉱に、姉は江別の軍事工場に行き、その後母と私と二才の弟は釧路町別保の元山（上双河辺）から下双河辺（現双河辺）に移転しました。四軒長屋の周囲の家も男の人達は戦争に行き、女、子供ばかりが残っていたようでした。

私は二十年四月から別保小学校に入学しましたが、戦争がたけなわになると、登下校時の空襲に備えてか、学校に行かずに、家の近くの共同浴場に集まったり遊んだりしていました。一学期の通知箋も近所の炭鉱の飯場に学年を問わず何十人（？）も集められ、私の担任とは異なる女の先生から渡されました。

夏休みになっていたのか、その前だったのか記憶が定かではありませんが、ある朝、空襲警報が発令されました。私達家族は家の前の崖に掘られた小さな防空壕に駆けこみました。（後日、母の言によると、隣人の防空壕に入れていただいたとのこと。）

「ゴオーッ」という今にも頭上に落ちてくるような飛行機の爆音が近づき、耳が張り裂けそうになると、母が「伏せてっ」と呼び私にマントをかぶせました。姉が以前に着ていたマントの中で、私は耳を押さえ息をつめて地面に伏せ、爆音が遠のくと顔を上げて「フーッ」と息をはくことを繰り返していました。

どのくらい時がたったのか・・・。爆音が止んだ時「バチバチ」と焚き火のような音が聞こえました。防空壕の入口に立てていた板をずらして下方をのぞき見ると、私の家の隣の長屋が炎に包まれていました。母達は家の前のドブ川のような所からバケツで水を汲み上げて炎にかけ続けましたが、火勢はおさまりません。炎上中の棟と私の家のある棟との間に大きな屋外共同トイレが建っていました。ここに延焼しそうになった時、火の方へトイレを押し出しました。しかし置土台の粗末な造りとはいえそう簡単には倒れません。力を合わせて押して押して、やっと共同トイレは傾いて落ち、私が住んでい

た棟は延焼をまぬがれました。

あの日はあちこちの家に爆弾が落ちて、壁に穴があいていたとか、誰かが死んだ等の話を大人の人達がしていました。

八月十五日、ラジオから流れる天皇の声を母に言われて正座して聞きましたが、何のことか全く理解できませんでした。

その後、父と姉も帰り、貧しく何も無い生活でしたが、我が家では幸いにも戦争で失ったものはありませんでした。

冬が近づき太平洋炭鉱で働く父といっしょに春採に転居し、湖畔小学校に転校しました。

担任の菅原順子先生は、爆弾で天板に穴のあいた机を私に示し「この机しか無いので我まんしてね」と言われました。湖畔小学校の体育館の半分は空襲で吹き飛ばされたのでしょうか、残っていたバラバラの床板の端に乗つかって飛び跳ねて遊んだことも、今となっては大切な思い出です。